TOKYO 東京

街に残る江戸の終焉跡

幕末歩き

～築地から青山はたまた板橋などなど～

最終回

高野長英ら蘭学者の警笛

BAKUMATSU WALKING

取材・文・構成◎三澤敏博（絡繰堂）

幕府に警笛を鳴らせ!!

高野長英ら蘭学者の警笛は虚しく鳴り響いた

一般に「幕末」といえばペリーの来航に始まり、黒船によって日本は泰平の眠りから覚めたというイメージが強い。確かにそういった要素は大きい。だが、ペリー以前にも外国船の来航は頻繁にあり、「異国船打払令」も出ていた程だ。実はそのような時代に、泰平の眠りどころか常に幕府に警笛を鳴らし続けてきた者たちがいた。高野長英をはじめとした蘭学者たちだ。幕末歩き最終回は、そんな幕末前夜の江戸東京を巡って行こう。

まず当時の幕府は鎖国していたとはいえ、オランダなどとは交易を行っていた。そこに来日してきたのが『**シーボルト（1）**』だ。来日したのは、ちょうど勝海舟の生まれた一八二三年。通常、日本にやってきた外国人は出島からは出れなかったが、シーボルトの場合、医学を教えるという理由で特例として、長崎の鳴滝村で診療所兼学問塾を開くことを許された。この塾に高野長英をはじめ、後に『**お玉が池種痘所（2）**』を開設した『**伊東玄朴（3）**』などが全国から集まってきて育っていったのだ。

しかし、この塾は意外な形で閉鎖となる。『**シーボルト事件（4）**』だ。これはシーボルトの所持品から、持ち出し厳禁の日本地図が見つかった事件で、当時、地図とは自国の最重要情報の一つであり、特に鎖国下にあった日本にとっては最高機密であった。ただちにシーボルトは国外追放となり、また捕縛の手は塾生や関係者にまで及んだ。この時、塾で最高成績を修めていた長英は、上手く逃げる事に成功し、江戸で『**大観堂学塾（5）**』を開いたのだ。

そしてその頃、蘭学に明るい渡辺崋山らと出会い「尚歯会」というサークルを結成した。この塾のメンバーがすごい。長英、崋山をはじめ伊豆の代官・江川太郎左衛門、勘定奉行であった川路聖謨などなど当時の知識人達が集まり蘭学を中心にあらゆる知識や情報の交換を行ったのだ。「尚歯会」の名前の由来は「歯（年齢の意）を尚ぶ会」、つまり「老人を大切に」といった意味なのだが、これは洋学に対する取り締まりが厳しかったため「尚歯会」という名で会の本質をカモフラージュしたというわけだ。

そして、この日本最高のシンクタンクで日々、様々な議論がなされている中、「モリソン号事件」が起こる。これは日本人漂流民を届けるためにやってきたアメリカ船を、幕府が「打払令」の名の下に砲撃したという事件。この事件を知った尚歯会のメンバーは、この幕府の愚行に強い危機感を感じた。そこで長英は夢で見た話として世界情勢を述べ、このままでは外国の侵略を招きかねないといった内容の「戊戌夢物語」を記したのだ。

だが、これがきっかけで尚歯会は幕府より睨まれることになった。過激な幕府批判ととられたのだ。そして、この取り締まりに力を注いだのが老中・水野と天保の改革で手腕を振った『**鳥居耀蔵（6）**』だ。この鳥居という男、出世のためなら捏造でも何でもする、いわゆる「悪代官」のような男で、甲斐守であったことから「妖怪（耀甲斐）」とあだ名される程であった。しかも尚歯会にとって不幸なことに、極度の洋学嫌いでもあった。そんな鳥居が、捏造の罪状で尚歯会のメンバーらを逮捕者していったのが「蛮社の獄」だ。これによって長英は『**伝馬町（7）**』にて無期懲役に処され、「尚歯会」も事実上の解散となったのだ。

その後、長英は「自分にはまだしなければならない事がある」と、牢屋に火事を引き起こして脱獄する。ここから長英の長い逃亡生活が始まるのだった。

各地を転々とした長英は、四国愛媛の宇和島藩に庇護された。当時の宇和島藩主『**伊達宗城（8）**』は、非常に洋学に理解を示し、積極的に藩政改革を行っていた人物だ。長英はこの宗城の下で、オランダ兵学書の翻訳などを行ったのだ。とはいうものの、その生活もわずか一年足らずで幕府に勘づかれ、長英は宇和島を離れる事に。そして今度は逆に人工の多い江戸に潜伏したのだった。ちなみに長英のいなくなった宇和島藩が、代打として招いたのが『**緒方洪庵（9）**』の適塾で医学を学んだ大村益次郎だ。宗城は大村に何と蒸気船まで建造させている。蘭語を読めるだけの医者に蒸気船建造を依頼する方もする方だが、作れてしまう大村もすごい。単なる一蘭方医であった大村が、後に軍隊を率いていったのには、こういった経験が要因しているのだ。また大村はシーボルトが日本人との間に産んだ娘・イネと交際していたとも伝えられている。

話戻って『**江戸に潜伏した長英（10～12）**』は、幕府を警戒して劇薬で顔を焼き、その人相を変えた。そこまでして警告を発し続けながら、長英は翻訳活動を続けたのだ。この頃、蘭学塾を開いていた勝海舟宅をに長英が訪ねて来たというエピソードも残されている。

だが、そんな努力も虚しく、長英は潜伏先を幕府に発見され、その場で命を絶った。潜伏がばれたのは、長英の翻訳の出来が良すぎたことによる。これ程のものは長英にしかできないという事から足が着いたのだ。ペリー来航は長英の壮絶の死から三年後。もう少し生きていれば、幕末史に大きく関わっていたに違いなく、非常に残念な話である。

蘭学者らの遺した遺産は、勝海舟ら幕末の人々に継承された

ところで「蛮社の獄」の後の幕府であるが、実は蘭学の弾圧などやっている場合ではなかった。長英らの予言が事実となった大事件、「アヘン戦争」が起きたのだ。すぐ隣にある大国「清」がイギリスに大敗したという事実は、幕府を大激震させ早急な国防対策が求められた。とはいっても、つい一年前に「蛮社の獄」で洋学の知識を持つ有識者を罰したばかり。何とも間抜けな話である。

ともあれ、対策を迫られた幕府は、かねてより西洋砲術の採用を進言していた『**高島秋帆（13）**』に目を付けた。秋帆は日本初の本格洋式砲術「高島流砲術」を完成させた人物で、自作で大砲まで作っていた。

しかし、ここでまた邪魔が入る。またも洋学嫌いの鳥居だ。鳥居は西洋砲術など役に立たないと、その採用を断固拒否した。その勢いは激しく、そこで幕府は、一度、高島の砲術を演習させてみて、その上で採用するかを決めることとなった。

高島の砲術演習は『**徳丸ヶ原（14～16）**』で行われた。百聞は一見にしかず、その衝撃は見る者全てを圧倒させた。それはこの地の名称が「高島平」とされたことにも証明されている。演習は大成功に終わり、高島砲術は正式に採用されることとなった。そしてそれは、お台場を建造した元尚歯会メンバー江川太郎左衛門に伝授されたのである。ちなみに勝海舟もこの演習を見学している。

しかししかし、この期に及んで、まだ執念深く洋学の追放を企てている男がいた。勿論、鳥居耀蔵である。鳥居は今度は長崎奉行らと手を組んで罪をでっちあげ、秋帆を逮捕するに至ったのだ。

だが、もともと無罪なので、取り調べなど進むはずもなく、その間に天保の改革の失敗などで政変がおき、鳥居も失脚となった。

そして新しく老中に就任したのが、後に勝海舟や島津斉彬を見いだした阿部正弘である。これで秋帆は無罪放免となった。ちなみに鳥居はその後、丸亀藩に永預けとなり、やがて明治維新を迎えた時、鳥居は「あれほど西洋蛮夷などと付き合うなと進言したのに、言うことを聞かないから徳川はこのような事態になった」などと自信満々に人に説いたという。

鳥居の為に犠牲になった尚歯会のメンバーをはじめ、常に警笛を鳴らし続けていた彼らが、幕府の邪魔無く動けていれば、泰平の眠りを貪っていたなどという狂歌もなく、幕末の時代はまた違った動きになっていたであろう。

といったところで、最後に幕末前夜を見直して、東京の幕末歩き、お開きです。

1【シーボルト像】築地の「あかつき公園」にある胸像。築地は彼の娘の「いね」が産院を開業した地でもある。 2【お玉が池種痘所跡】伊東玄朴らによって建てられたお玉が池の種痘所。後の東大学医学部の前身である。3【伊東玄朴の墓】玄朴は谷中の天竜院に眠る。 4【土生玄碩の墓】眼科医だった玄碩はシーボルトに葵の紋服を贈りったため、シーボルト事件に連座して逮捕された。築地本願寺に碑が建てられている。 5【大観堂学塾跡】シーボルト事件の捜査より逃れた長英は、千代田区平河町に塾を開いた。 6【鳥居耀蔵の墓】駒込の吉祥寺にある鳥居耀蔵の墓。同寺には榎本武揚他、多くの幕末関係者が眠る。 7【伊達宗城の墓】谷中霊園の宗城の墓。松平春嶽・山内容堂・島津斉彬ら四人で幕末の四賢侯と称される。 8【伝馬町】長英の捕らえられた伝馬町の牢。長英は火事を引き起こし逃亡した。 9【緒方洪庵の墓】大阪の敵塾で大村益次郎をはじめ福沢諭吉など多くの偉人を輩出した洪庵。墓は文京区の高林寺にある。 10【長英潜伏の跡地】伝馬町より逃亡した長英は板橋に住む長英の門人・水村玄洞の家に隠れた。

11【長英の隠れ家跡】現青山スパイラルの地が、長英の隠れ家があった場所である。12【高野長英の碑】青山の隠れ家に近い善光寺には勝海舟の撰文による高野長英の碑がある。 13【高島秋帆の墓】文京区の大円寺に眠る高島秋帆。釈放後は講武所砲術師範役となった。 14【徳丸が原の演習地】板橋区の高島平はかつて「徳丸が原」と呼ばれていた。ここで高島秋帆が演習したため、後にこの地が「高島平」と名付けられた。 15【高島秋帆先生紀功碑】板橋の松月院は、秋帆らが演習の際に宿舎にした寺だ。その所以で境内には秋帆の碑が建てられている。大砲と砲弾でデザインされたユニークな形である。 16【松宝閣】松月院の宝物館「松宝閣」には砲弾や書など、秋帆ゆかりの品々が数多く展示されている。必見なのは並んで展示されていた歴代徳川将軍の朱印状。勿論、家定や家茂のものもある。